

講演概要

「人と社会をつなぐ文化の役割～まちにアートが必要なわけ～」

藤野一夫（芸術文化観光専門職大学副学長、神戸大学名誉教授、医療文化経済グローバル研究所理事・主任研究員）

少子高齢化に歯止めのかからない現代日本の地域社会において、誰もが健康で幸福な人生を享受できる仕組みを社会実装したい。「ウェルビーイング」とは心身の健康が維持されるだけでなく、社会生活の面においても満たされた状態を意味します。コミュニティの中で孤立することなく他者と良好な関係をつくり、自分の居場所や役割を持つことで自己肯定感を高めることのできる「社会的処方」と、それを担う「リンクワーカー」が注目されています。アートマネジメントの分野でも「文化的コモンズ」（文化的交流の共有地、入会地）の形成の担い手であるコーディネーターの役割が重要です。

本講話では、まず養父市の各地域に固有の有形・無形の文化資源、文化施設、文化活動を手がかりに「まちにアートが必要なわけ」を、「文化的コモンズ」の形成に注目して考えました。30年以上の歴史をもち国際的にも知られた「ビバホールチェロコンクール」、大屋の「木彫フォークアート」によるまちづくり、「せきのみや子ども歌舞伎」、そしてYBファブでは「文化芸術事業は社会的処方推進の一環である」という意識をもって「出会い・交流から社会的処方へ」の取組を進めています。また、養父市内4つの公民館に登録されている市民・文化活動団体の会員総数は7,800人余り。22,000人の市民のうち三人に一人以上が参加していることとなります。数字上ですが、全国的に見ても高い比率だと思えます。

社会的処方の分野で「リンクワーカー」と呼ばれている、医療者とコミュニティグループとのつなぎ手を、アートマネジメントの分野では「コーディネーター」と呼んでいます。アートコーディネーターが市民とともに、伝統芸能やお祭り、文化団体やアートNPO、学校や福祉施設など、様々な分野の担い手と手をむすび、「文化的コモンズ」の形成を牽引することが大切です。その意味で、地域の文化施設は、文化的なつながりを求めて人々が集まり、「地域の記憶と共感の装置」として機能する文化拠点を目指すべきです。とりわけ地方都市では、医療・福祉施設との連携が強く求められています。

そのためには、従来の仲良しクラブの境界を超えて、文化・芸術活動を通じて、様々な分野や、自分（たち）とは異なる他者とをつなぐコーディネーターの存在が不可欠です。リンクワーカーとコーディネーターが表裏一体の関係となって活躍できれば、社会的処方の普及面でも、文化的コモンズの形成面でも、画期的な相乗効果が生まれるはずです。医療文化経済グローバル研究所を設立した養父市は、文化芸術振興と地域包括ケアとを融合して地域課題を解決する、全国でも先端的なモデルを確立できるのです。